

97 誌上発表

福井崇蘭館とその蔵書

小曾戸 洋

北里大学東洋医学総合研究所／武田科学振興財団杏雨書屋

京都黒門元誓願寺南の自邸を崇蘭館と称した名家・福井氏は臨床医家として知られる一方、古医書の研究、蒐集家として大きな足跡を残した。とはいえ、漢方界でも、医学史の分野でもまとまった研究はこれまでない。演者は近年福井氏崇蘭館旧蔵の古医書に接する機会に恵まれたので、以下、その家系と蔵書について述べる。

福井家は足利尊氏の子孫とされ、先祖は武人であったが、医家としての名声を確固としたのは楓亭である。楓亭（1725-92）の名は輓・立啓・啓発、字は大車、通称は柳介。祖父の始めた医を再興するため医学の研鑽に励み、ついに京で医名を博した。晩年には幕府医官として江戸に召され、躋寿館で『靈枢』を講じた。江戸で没し品川東海寺に葬られた。著書に『方読弁解』『崇蘭館集驗方』『瀕湖脈解』『病因考』『傷寒論読』ほかがある。

楓亭の長男の承順（1748-95、字は子巽、通称は主一郎、号は堂構）は父楓亭の没後、江戸の福井家を継いで幕府医員となったが、まもなく没して品川東海寺に葬られた。跡は男の受益が継いだ。

榕亭（1753-1844）は楓亭の男で、名は需、字は光亨・終吉。典薬寮医学博士、正四位下、丹波守に昇進。書籍、書画、器物の蒐集に勤めた。墓は嵯峨二尊院。弟に小車（～1800、号は敬斎）がいる。

棗園（1783-1849）は榕亭の長男で、名は晋、字は貞吉。典薬寮御医、従四位上、近江守を任じた。頼山陽や小石元瑞と親交があった。妻は仁和寺坊官芝築地法印の娘。妹の榮女は古義堂伊藤東峯に嫁ぎ、弟の随（有功）は典薬山本家の養子（山本達所）となり、子孫は小石家とも婚姻関係を結んでいる。次の弟の徳成は典薬荻野家の養子（元凱の孫）となった。棗園以下も二尊院に葬られている。

恒斎（1830-1900）は棗園の長男で、名は貞憲。典薬寮医師（権医博士）、従五位上、豊後守（河内守）。明治元年尚薬として東上するもまもなく帰京。同20年再び皇室の御医として東上し帰京。浅田宗伯とも親しかった。妻は今大路氏。医系は恒斎で絶えた。恒斎の子に成功があり、その子に貞明・貞一の兄弟がいる。

『河清偶記』『経籍訪古志』『崇蘭館医書目』などの記載からもうかがえるように、江戸後期、関西の医界の蔵書家としては福井崇蘭館が群を抜いていた。しかも、幕末～明治の変革期に、従来の漢方蔵書家（荻野・高階・伊良子・三角ほか）が勢いを失っていくなか、それらの貴重書は次第に崇蘭館に集約され、恒斎の時代に質量ともに絶頂を極めたのであった。

福井崇蘭館本の本格的門外流出は昭和の戦後まもなく始まる。仁和寺本『黄帝内经太素』『新修本草』、宋版『外台秘要方』の杏雨書屋移管などがそれである。古書市場には戦前から「崇蘭館蔵」印のある医書や崇蘭館本と思しき書が出回っている。

近くでは平成15年以降、古書市場で医書以外を含めた崇蘭館本の出現をよく目にするようになった。一部に思文閣の関与がうかがわれる。

当時、崇蘭館医書の売買には京都寺町通の古美術商、福田元永堂が関わった。演者には福田元永堂から直接接があり、福井崇蘭館の名は明かさないものの、演者は平成15年12月9日、福田元永堂でこれらの医書群を目睹してすぐに崇蘭館本だと確信した。のちにこれらのうち貴重書数点は杏雨書屋が購入した。福井家は明治初期に小松原に移ったので、福井家蔵の重器はその筋では小松原ものといわれる。

平成22年頃からは崇蘭館本がしばしば古書オークションに出品されるようになった。中国バブルの時勢のさなか残念ながら中国業者の手に落ちてしまったものもある。

種々の経緯の末に残った崇蘭館本医書は、近年、幸い文化庁の管轄下となり、調査・整理されて、杏雨書屋に委託されつつある。これらについては今後検討を重ね、順次報告していく所存である。